

未来へつなぐ覚悟

有田川町立吉備中学校 2年 嘉成潤羽

「あとをよろしくお願いします。」これは、生涯をかけて戦争を憎み、平和の尊さを伝えようとした、広島県の「詩画人」が残した言葉だ。戦後80年、私たちにこの言葉の重さとそこに込められた想いを背負う覚悟はあるだろうか。

正直に言うと、平和学習は苦手だ。映像や写真で見る戦争は、すべてが残酷で悲惨だ。この日本で起こったことと言われても非現実的だと感じてしまう。そんな私が戦争について考えなおすきっかけになったのは、ある人物へのインタビュー記事だった。その男性は、戦争の中を生き抜いた父の言葉について語っていた。凄惨な戦場で兵士として身も心も痛みを耐えて生きながら、終戦をむかえてもなお帰国への希望は絶たれ、生死の境をさまようこともあったそうだ。そんな中で、彼はクレジットカード程の小さな紙に、単語を書き続けた。単語さえあれば自分は絵として表現できる、戦争がもたらす悲劇を次の世代に伝えなければならない。その強い意志が、膨大な量の作品として現在に残されている。私が平和学習の中で、最も印象に残っている「おこりじぞう」。その絵本の作画を担当したのが彼であると知ったときは、本当に驚いた。まるで本人から、「戦争を忘れてはいけない」、そう言われたような衝撃だった。怒りに満ちた表情で涙を流すお地蔵さんは、彼自身の気持ちとぴったり重なるように感じた。

「戦争」という言葉の恐怖、それは戦争を知らない私にはとても漠然としている。実際、戦争体験者は高齢化し、戦地の悲惨な状況を直接知る人は急速に少なくなっているという。戦争が「記憶」から「歴史」へと変わりつつある中、私たちは戦争とどのように向き合えばいいのだろうか。

戦争は単なる昔話ではない。テレビで見たウクライナの様子は、本当に今なのかと疑いたくなる程であった。ではこの悲劇は、何がきっかけで始まるのだろうか。戦争は「国と国との大げんか」と表現される。ある日、私はスーパーで子供の

泣き叫ぶ声に足をとめた。買い物カートの取り合いで、兄弟げんかが勃発した。お兄ちゃんが無理矢理主導権を奪い、弟がお兄ちゃんの腕をつかんで離さなかった。腹を立てたお兄ちゃんが、弟を突き飛ばし、弟は泣き出してしまったのだ。私は小さな戦争を見た気分になった。自分の欲を優先し、相手の痛みを考えず、周囲の迷惑も気にしない。戦争もけんかも、お互い何かを無理矢理手に入れようとするのが争いの火種となっている。「腹が立った」で人を傷つける時代だ。「けんかだからたいしたことはない」とは言えないと思う。ただ、この二つには大きく違うところがある。けんかをするのは当事者同士、戦争はほんの一部の人間が起こし、多くの命を無理矢理戦場へと駆り立てる。国同士の争いは、本来守られるべき多くの人々を不幸にしてしまう。時代の移り変わりと共に、こんな恐ろしいものが足音を潜ませて近づいてきているかもしれない。できれば目を背けていたいと思ってしまった。

記事の男性は「父の考えや遺したものが、今の私たちにとってヒントになるのではないか」と考え、本を執筆した。戦争を起こさせないために、暴力ではなく表現で戦うという父の生き方が、男性の心にしっかりと焼き付いているのだと思った。自分が戦争で負った傷、原爆がもたらした脅威、被爆した人々の苦しみは、簡単に背負えるものではなかっただろう。「こわいものは描きたくはないのだが、こわいものを地上から無くすためには描かなければならない」。おこりじぞうの末尾に書かれた言葉からは、反戦と平和への想いを伝えるのだという強い意志と覚悟が感じられる。私たちはもっと戦争を知らなければならない。戦争体験者が減ったとしても、日本のあちこちに反戦・平和への想いは遺されている。それらに向き合うことで、自分の中に蓄積されていく恐怖心が、世界から戦争を遠ざけるためにもっとも必要ではないだろうか。

「あとをよろしく願います」、私は今その言葉としっかり向き合う覚悟を決めた。